

## インフラという概念

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おお いし ひさ かず 大石 久和



日刊工業新聞に「卓見異見」というコーナーがあって、毎週月曜日に数名の筆者が回り持ちでコラムを連載している。筆者も、ここにインフラ論を何回か書いてきたが、その最終に、「なぜ日本人はインフラという概念を持ってないのか」についての持論を記述した。これは従来提出されたことがほとんどない「日本人論」にもなっていると考えている。西洋には、Infra-Structure（下の方の構造）という用語があり、その重要性は多くの人々が共有しているが、その言葉、つまり概念はどうして生まれたのだろうか。

インフラ論については、本欄でも何度か触れてきたが、今回はその所以を考えてみたい。

### 筆者の思考遍歴

わが日本語にはインフラストラクチャーに該当する用語がないということは、「社会にはそれを支える基礎構造の存在が不可欠で、それなくしては人々の暮らしは安全にならないし、快適にも暮らせず、さらには生活や産業の効率化も達成できない」という考えや概念を用語化してこなかったということである。

なぜ用語化しなかったのかと言えば、われわれ日本人は長い歴史において、生活のなか

でこうした概念を必要とする経験をしてこなかったということなのだが、その経験とは何なんだろう。

こうした考えを持ち始めたのは、「国土学」にたどり着いてからしばらくした10年以上前のことだった。国土学というのは、現役の局長時代に「結局、われわれ建設省がやっている仕事というのは、国土に何らかの働きかけをして国土から恵みをいただく」ことなのではないかとの考えに行き着いたことがきっかけだった。

「国土に働きかければかけるほど、国土は多くの恵みをわれわれに返してくれる」という作用を、「公共事業」という経済的にはフローの概念でしかない言葉で表現したのでは、その本質に到達できないと考えたのだった。

いわば、インフラストラクチャー概念の気付きだったとも言えるのだが、付記すれば、インフラという言葉には、「国土学」という言葉が持っている「それぞれの民族の暮らしを成り立たせている国土との葛藤や格闘」というニュアンスがない。

民族の個性は民族の経験が造り上げるものだ。その経験には、民族が暮らしてきた国土の特徴が支配的に作用しているのである。

## 小平野での小集落と大平原での大集落

何度か紹介しているように、江戸時代の村の数は約7万程度もあったとの報告がある。すると集落の大きさは400~500人程度で数十戸くらいで一つのコミュニティが成立していたことになる。

山あいの盆地や、三方を山で囲まれた扇状地などを暮らしの舞台としていたから、暮らしの単位はせいぜいこの大きさで、これは縄文時代の三内丸山遺跡の規模でもあった。ということは、日本人は1万年を超える長い時間をこうした規模で暮らしてきたことになる。

われわれは、この単位で暮らしを支配するルールや、人間関係の間合いや距離の取り方を育んできたのだ。お互いの約束を、できるだけ文書化せず、話し合いでの決めごとで処理してきたのも、小さな集落で「気まずい思い」をせずに暮らしていく知恵だったのだ。

ところが、西洋や中国ではそうはいかないのだ。なぜなら、彼らの居住地は大平原の中だからである。数百km四方に広がっている見通しのよい大平原で暮らそうと思えば、はるか遠方からこの居住地を目指し、砂煙を上げて駆けながら攻め込んでくる外敵からの防御態勢が整っていなければできないものではない。

## インフラ概念の獲得

では、彼らは何を用意したのか。それは、「みんなで力を合わせてみんなのために構築する構造物(=インフラ)」だったのだが、このインフラを西洋が必要としたのは、いつで、それは何だったのかに関心が向かったのだ。

調べていくと、現在の西洋文明のルーツになっていて、世界文明の基礎にもなっている最も古い文明であるシュメール文明にまでさかのぼったのである。今から5500年も前に都市国家をつくったシュメールの都市は、すでに城壁で囲われていたのだ。

周囲を巡らす巨大な城壁の建設には、多くの費用と労力が欠かせないが、それでも城壁なくしては都市内に大勢が集まることなど出来なかったから、やむなく城壁を建設したのだ。食糧不足のときには、農耕民族のシュメールの作物を狙って、周辺の山岳民族や遊牧民族が襲撃をかけ、その際、シュメール人は妻子の残酷な死を経験したに違いない。

悲劇的な経験を何度もし、悲惨な愛するものの死に繰り返し直面したから、ついに都市全体を囲む強固で長大な城壁を建設せざるを得なかったのだ。

こうして、シュメール人は「都市城壁」というインフラを発明し、そのおかげで彼らは神を創造し、王政という統治制度を編み出し、少し後には文字も発明するなど、安定した生活を確保できたのだ。まさに「都市は文明のゆりかご」と言われるとおりなのだ。

これは、端的に言うところ「大量虐殺経験の有無」から来ている日本と西洋・中国との違いなのだが、これを強調しなければならないのは、日本史の専門家は西洋史や中国史は語らないし、その逆もしかりで、西洋史の専門家は日本史に興味を示さないからなのである。

つまり、双方を眺めた歴史学が存在しないのである。国土の特徴とそこでの経験の違いに着目した「国土(=土木)歴史学」がこの地平を切り開いたのだと、筆者は勝手に誇りに感じているのである。